

研究部 ぶらり

令和3年3月3日(水) No.9
研究部(牧野, 早坂)

共同研究 第2年次・後半【令和3年度】の研究へ

— 2月26日 研究全体会IV —

2月26日(金)に行った研究全体会IVの協議を整理しました。

<研究主任の提案から>

【研究主題】
学校教育目標
「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」
を目指して
— 本質に迫る授業を通して — (第2年次・中間)

令和3年
1月29日
令和2年度(金)
公開研究会



宮城教育大学附属小学校
公開研究会で見えたもの ~提案授業や講演会から~
研究主任(三浦)
※赤字は石井英真先生の講演に関連付けたもの

授業改善を軸にした学校改革の戦略②

- 教師個々の力を伸ばすという視点だけでなく、学校の組織力を高めるという視点から、学習する組織の中心(教師達が力を高め合い、刻を共有・蓄積し、連帯を生み出す場)として、「授業研究」(授業公開とその事前・事後の検討会を通して教師同士が学び合う校内研修の方法)を生かしていく。
- めざす子ども像をただ掲げるだけでなく、その実現をめざして実践を積み重ね、その具体的な子どもの姿を、また、それを生み出す手立てや方法論等を教師集団で確認・共有していく。新しい取り組みのよさを頭で理解するだけでなく、それに向けて実践し、実際に子どもたちの姿が変わってほじめて、教師たちは取り組みの意味を実感し授業は変わっていく。
- 授業後の協議会の議論は、PDCAサイクル(成果や方法へと急ぐ評価的思考)としてではなく、逆に、出来事の意味のエピソード的理解(学びの多様性やプロセスの一回性を掲げ下げの解釈的思考)としてではなく、めざす子ども像の内実こそ実践においてさぐり確認しつづけること(価値追求的思考)が重要である。

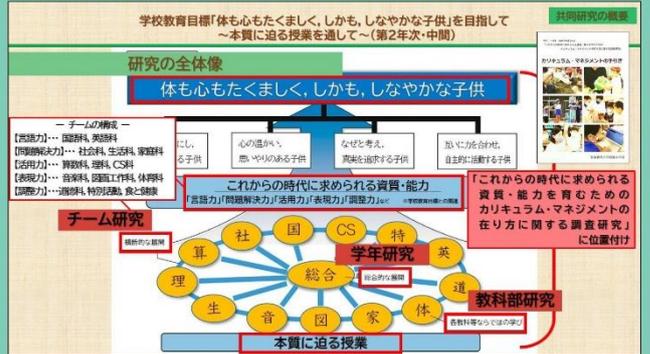


学校文化として「**願い=学校教育目標**」を浸透・実現させる
五つの資質・能力は、あくまでもフォーカスの当て方
五つの資質・能力の詳細を探るのではなく
「**本質に迫る授業**」を探り、学校教育目標の具現化を目指す





「**教科等**」の学問におい・本物のおいがある授業へ 学習者目線で
発問をもっと検討・吟味しよう 「ねらいに向かって悩んでいるか」
プロセスをもっと子供に委ねよう 怖がらないで



学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供」を目指して
～本質に迫る授業を通して～(第2年次・中間)

研究の全体像

体も心もたくましく、しかも、しなやかな子供

【共通研究の推進】
「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」に位置付け

「**願い=学校教育目標**」に向けて **点の授業改善**ではなく、**面での授業改善**
一人・一つの教科部(点)だけでは不十分 全員・全部で
一人も面での授業改善(マルチ化)を目指そう (“専門”の考え方を捨てる)

<主な意見から>

- 【学校教育目標をブレイクダウンした五つの資質・能力に関するもの】
- 今年度取り組んだチーム研究では、「〇〇力」に特化した授業づくり・授業改善に取り組んだ。来年度は、今年度とは異なる「〇〇力」で取り組んでみたい。
 - 授業以外の場面(例えば、研修旅行や係活動、遊びなど)でも「〇〇力」を発揮する子供の姿が見られた。あまり難しく考えずに、「これが〇〇力を発揮している姿だ」と来年度も話し合えればよい。
 - 「五つの資質・能力はフォーカスの当て方であり、その詳細を追い求めるわけではない」ということに納得する。〇〇力を目的化することはせず、子供の姿として育成を目指していきたい。
- 【研究のアプローチや取組に関するもの】
- 今回の公開研究会では授業を3方向から撮影したことで、振り返って動画を見る機会がたくさんあった。授業をやって終わりではなく、振り返ることの重要性を認識して研究を進めたい。
 - 子供と大に関わり、授業後に参観者と対話する。これらが「見る目を養う」ことにつながるの、それらに自覚的に取り組んでいかなければならない。
 - 理論的でパフォーマンス的な授業が多いことを危惧している。頭でっかちにならずに、目の前の子供を大切にしながら、地に足を付けて日々の授業を行っていききたい。

<宮城教育大学・本田伊克先生から>

研究には紆余曲折が付きものだが、子供の姿を大切にすることは欠かせないでほしい。そして、教員が替わったとしても学校文化として学校教育目標や授業づくりを引き継いでいってほしい。

今回の研究全体会IVでも、全員で協議を深めることができたことと振り返ります。来年度の研究について研究部で更に検討を重ねて、新年度4月の研究全体会Iで新研究部から提案します。まずは、姿を丁寧に見取りながら、子供たちが一つでも成長の階段を上って進級することができるように年度末の指導に当たっていきましょう。
文責:研究主任(三浦)